

先日オフィスの書庫で、今から19年前に発行された一冊の古い本を手にとった。中国の専門家が、2020年の中国の姿を、シナリオ分析を織り交せて予測した2000年発行の本である。中国の経済拡大・国際化、国防近代化等が論じられており、経済発展により中国が日本のライバルとなり、中国産業のハイテク化の進展で、軍事技術への転用を歓迎しない米国との間で2020年前後に米中経済摩擦が生じる可能性について詳述されていた。慧眼である。

平成元年、中国の名目GDPは日本の15%だったが、令和元年のそれは日本の2.7倍と予測されている。米国に至っては日本の4.1倍（IMF予測）。産業構造が変化するなかで、日中の経済規模は、平成時代の30年で逆転、その差は拡大した。我々は、この変化から何を学び、この現実はどう向き合うのか。中国の産業は、国際競争を勝ち抜き、破竹の勢いで高度化している。我が世の春を謳歌した日本の得意分野も大きなうねりに直面し、半導体、モビリティ、AIなど、社会を支える産業における日中の関係も、令和時代に大きく変容するだろう。現実や潮流を解釈し、今後のシフトやバランスを見通すビジョンと、それを実践する力が求められる。

中国は、国際経済社会における途上国に許された優位性、デジタルトランスフォーメーションと国内政治体制の親和性、イノベーションにおける社会実装が比較的容易なマーケット環境など、先進国とは一線を画す強みを有する。これから30年後、2049年に中国は建国100周年を迎える。平成時代のライバル競争の30年から、令和時代は共鳴と互恵の30年へ。本誌がそうした発信の一部になれば、幸いである。

編集長（総務部長） 田丸伸介

海外投融資

Vol.28 No.6（通巻168号）
2019年11月25日発行

発行
一般財団法人 海外投融資情報財団

発行人
日塔 貴昭
〒102-0073
東京都千代田区九段北二丁目
3番6号 九段北二丁目ビル
TEL. 03-5210-3311（代）
URL. www.joi.or.jp

制作協力
（株）エディポック

*本誌に掲載されている記事の内容や意見は、海外投融資情報財団の公式見解を示すものではありません。

●禁 無断転載

All rights reserved. No part of this magazine may be reproduced in any form or in any means without written permission from the publisher.
©Japan Institute for Overseas Investment Printed in Japan



九段だより バーのある人生（3） 特別な日にはマティーニを

最近、バーについての特集を組んだ雑誌をよく見かける。店や酒の紹介やマナーについてなど内容はさまざまだが、それらは「敷居は高くないですよ」といった趣旨のものが多いように思う。しかし私の「バーのある人生」を振り返るとそれは修練の場でもあった。そんなことに想いを巡らすと「カクテルの王様」といわれるマティーニについて書かずにはいられない。

マティーニは、大量のジンにベルモットを加えたアルコール分40度前後の「酒」のカタマリである。あれを最初から「旨い」と感じて飲んだ人はいるのだろうか？

多くの人は、映画のイメージなどに憧れて我慢してグラスを傾けたというのが最初ではないだろうか。私も20代後半の頃、吉祥寺のバーで戦後の進駐軍のクラブで修行した老バーテンダーに憧れ半分でマティーニを頼んだところ、巨大カクテルグラスになみなみ注がれたマティーニの「特盛り」が出てきて、必死の思いで飲み干したことがある。当然、店を出た後の記憶はない。

バーテンダーにとっても、マティーニは技量やこだわりが発揮される特別なカクテルである。マティーニの注文が入るとバーテンダーの表情は静かに引き締まる。マティーニを飲む行為は、バーテンダーが自分のための1杯を作っているときから始まっている。そう、これは舌で味わう酒ではなく、「ハートで味わう酒」なのだ。

私がそんなふうに悟ったきっかけは10年前に母を亡くし

た時である。当時大阪単身赴任であった私は、忌引が終わって初出勤した夜、京都祇園のバーに赴き、母と同じ昭和15年生まれの「お母さん」に気遣いのお礼と葬儀が済んだ報告をした。そこで2杯のマティーニを作って一緒に献杯してくれた「お母さん」は、グラスを掲げるなり一口でそれを飲み干してしまった。それを見て私もつられて口にしたグラスの底を引き上げた。後にも先にもマティーニを「一気飲み」したのはこの時だけである。ただその沁みわたる味は、その時の心持ちと合わせて今でも鮮明に覚えている。

今でも「きちんと飲みたい」気分のときにはマティーニを注文する。ハイボールやアルコール度低めの体に優しいカクテルもいいが、何かの節目だったり気持ちにハリを入れたいときには、やっぱりこれである。それは、敷居を高くすることによって得られる「気持ちよさ」である。

（専務理事 日塔 貴昭）

